

◆ 妊娠糖尿病を伴う多胎妊娠は 2 型糖尿病の発症リスクを上昇させる：肥満の影響

Greater risk of type 2 diabetes progression in multifetal gestations with gestational diabetes : the impact of obesity.
Naeh A et al.

Am J Obstet Gynecol : S0002-9378 (23) 02060-4, 2023. doi : 10.1016/j.ajog.2023.11.1246.

背景 多胎妊娠における妊娠糖尿病と有害転帰の関係は複雑で、いまだに明らかになっていない。特に多胎妊娠における妊娠糖尿病から 2 型糖尿病への発症リスクに関する研究は限られており、一定の見解は得られていない。

目的 単胎妊娠と多胎妊娠の妊娠糖尿病から 2 型糖尿病の発症リスクを明らかにすることを目的としている。

研究デザイン 2017 年 1 月 1 日～2020 年 12 月 31 日の期間に妊娠した人を対象とし、以下の 4 群に分け 2 型糖尿病の発症リスクの解析を行った。① 妊娠糖尿病のない単胎妊娠、② 妊娠糖尿病のある単胎妊娠、③ 妊娠糖尿病のない多胎妊娠、④ 妊娠糖尿病のある多胎妊娠。

結果 88,611 人の分娩患者のうち、空腹時血糖 > 125 mg/dL (250 人)、死産 (17,290 人)、糖負荷試験未実施 (9,430 人) を除いた 61,891 人が対象となった。妊娠糖尿病から 2 型糖尿病を発症した有病率は、単胎妊娠群で 6.5% (114/1,759 人)、多胎妊娠群で 9.4% (5/53 人) で

あった。ハザード比は、単胎妊娠では 4.62、多胎妊娠では 9.26 であり、いずれも $p < .001$ だった。肥満の有無に基づく層別解析の結果、肥満のない妊婦 ($BMI < 30 \text{ kg/m}^2$) では、妊娠糖尿病のある単胎妊娠では 2 型糖尿病のリスクをハザード比 : 10.24 ($p < .001$) 増加させたが、多胎妊娠では有意なリスクはなかった (ハザード比 : 9.15, $p = 0.59$)。肥満のある場合 ($BMI \geq 30 \text{ kg/m}^2$) では、妊娠糖尿病のある単胎妊娠と多胎妊娠の両方で 2 型糖尿病のリスク上昇と関連していた (ハザード比 : 3.66, $p < .001$ および 9.31, $p = 0.03$)。

結論 単胎妊娠の妊娠糖尿病に比べ、多胎妊娠の妊娠糖尿病は 2 型糖尿病への発症リスクを 2 倍にする。この結果は特に肥満患者にみられた。2 型糖尿病の早期診断と介入を可能にするために、特に肥満を合併した妊娠糖尿病のある多胎妊婦には注意が必要であり、産後のフォローアップを行うことの重要性を示唆している。

(宮崎大学産婦人科 中山徹男 抄)

◆ 10 パーセンタイル未満の胎児発育不全において母体安静は児の発育を改善する

Maternal rest improves growth in small-for-gestational-age fetuses (<10th percentile)
DeVore GR et al.

Am J Obstet Gynecol : S0002-9378 (24) 00530-1, 2024. doi : 10.1016/j.ajog.2024.04.024

背景 胎児の推定体重が在胎週数に対して小さい (< 10 パーセンタイル) と診断された場合、胎児監視を強化し、胎児の状態と分娩のタイミングを適切に評価することが標準的な管理である。これまでの観察研究において、母体の左側臥位安静により子宮血流が改善することが示された。一方、ランダム化臨床試験においては、母体の安静は胎児発育を改善しないと報告されている。

目的 胎児発育不全 (< 10 パーセンタイル) において、母体の安静と胎児発育との関連性を検討する。

研究方法 2005～2021 年にカリフォルニア州の超音波データベースに登録された症例を対象に後方視的研究をした。対照群として、安静指導を行っていないテキサス-ミシガンコホート、コロラドコホートの 2 つが設定され

た。胎児推定体重が在胎週数相当の 10 パーセンタイル未満と診断された場合、母体の左側臥位安静指導を行い、2 週後に再度超音波検査で評価を行った。母体への安静指導の有無と胎児計測結果を検討した。

結果 母体への安静指導が行われた 265 例において 199 例 (75%) の胎児推定体重が週数相当に改善した。対照群で胎児推定体重の改善を認めたものは、テキサス-ミシガンコホートで 7/37 例 (19%)、コロラドコホートで 13/111 (12%) で、母体安静群と比較して有意に少ない値となった。

結論 10 パーセンタイル未満の胎児発育不全において、母体安静は児発育を改善することが示唆された。

(宮崎大学産婦人科 冨森馨予 抄)